特集 地域の中の「コミュニティデザイナー」はいかに生まれるか

《3》横浜でつながりを創る人々に伺う

⑥ 映画、音楽、読書…様々な分野からのアプローチ「つながりづくりは、つながりたい人を見つけて、つながりたい人同士をつなげること」

旭区に住む理由
～さまざまなつながりづくり

私は現在自分が住む旭区を拠点として「旭区まちづくりポット」という団体を立ち上げ活動しています。なぜ旭区に住んだのかというと、知り合いが多く、生活を豊かにできる関係がそこにあったからです。開港150周年を記念したイベントで、会場がズーラシアの現サバンナゾーンにあったのですが、そこでできた旭区の方々とのつながりが人生の中でプラスになると思えたことが大きな理由です。

現在旭区内で私が関わっている活動がいくつかあります。旭区民文化センター「サンハート」の区民企画委員として参加している「サンハートあさひ名画座プロジェクト」は、映画上映会と交流会を組み合わせた企画で、好評をいただきすでに5回実施しています。旭区には残念ながら映画館は1館もないので、なければつくればいいじゃないかという発想からスタートしています。実はこの活動には参加者の方に一緒に企画する仲間になってもらいたいというねらいもあり、すでにそういう方がいらっしゃいます。このように人と人をつなげる工夫は常に考えています。

この活動以外にも、短編映画づくりを通して地域の魅力を発見する「映画づくりワークショップ」、アパート丸々一棟を使ったブックイベント「ビブリオ・アパルトマン」、今年度の新たな活動としては、読書愛好者のつながりづくりを目指す「読書人ネットワークプロジェクト」、ヨコハマアートサイトという助成事業にも採択された「白根通り作曲プロジェクト」などがあります。

このように並べて見ると何をやっているのかよくわからないと感じられるかもしれませんが、私の中では人と人をつなげる活動ということで一貫しています。

サンハートあさひ名画座プロジェクト

ビブリオ・アパルトマン

強いつながりだけでなく、弱いつながりも～つながりをつくる手法

人と人をつなげるといいましたが、正確には、つながりたい人を見つけて、つながりたい人同士をつなげるということですね。無理やりこの人とこの人をつなげようとするのではなくて、つながりたい人同士をつなげているだけです。選択権のないつながりもありますが、つながりは選びたいし選んでいいと私は思っています。だから、そういう中でつながりたいという人同士をつないであげるということがより必要とされていると思います。もう少し具体的に言うと、社会的地位とか立場が違うのでつながりにくいと思っていても、実は少し自己紹介すると、趣味が一緒で意気投合することもあります。ですから、自分で行うワークショップという手法の中では自己紹介を重視しています。お互いが何者であるかという社会的地位以上にその人自身がどんな人間かということをお互いに開示する機会をつくることが重要だと思います。そうでないと利害関係だけのつながりになってしまいます。利害がなくなれば関係が壊れてしまうというのではなくて、利害を越えてつながりをつくっていくことを意図している、もしくは工夫してい

沼田　真一 さん
旭区まちづくりポット代表、ビッグバン・ヌマ株式会社代表取締役、旭区民文化センター「サンハート」区民企画委員
まちづくりや人のつながりについて研究し、勉強会、交流会、実践プロジェクトなどを通して旭区のまちづくりを進める活動を展開している。

聞き手
田中　昭彦　旭区区政推進課地域力推進担当係長
小山　敬之　旭区区政推進課地域力推進担当
武田　あすか　旭区区政推進課地域力推進担当

るのかもしれません。

地縁に根ざし生活に密着した、いわゆる「強いつながり」はすでに自治会町内会がつくっているのでそれで十分かと。私は、もう少し「弱いつながり」というものをつくっていくことが求められていると思っています。「強いつながり」は絶対に必要です。特に防犯という観点からも「知っている」関係をつくるということは安心安全なまちをつくるためには不可欠です。その一方で、新しい未来をつくっていくということになると、開放的でかつ弱い、要するに「よく知らない人」かもしれないけど、新しい知識や技術を持っている人が出入り可能な環境が必要です。さもないと、まちは変わらず、現状維持で精一杯になり、減退し減衰し、滅んでいくのではという危機感があります。それは震災復興の仕事で強く感じることでもあるのです。

まちの映画館を復活させる ～小さくて大きな成功体験

現在の活動のきっかけになったのは、大学時代にプロジェクトリーダーとして関わった「早稲田松竹復活プロジェクト」になると思います。当時から映画が好きだったこともありますが、都市計画を専攻しており、起業する仲間のネットワークがありました。そんな中、大学近くの映画館が休館してしまったのです。映画館があることによって地域の人たちが集ってくる機能、個人的体験を共有する文化を失ってはいけないと思いました。それをうまく復活させることはできないかということでプロジェクトを立ち上げました。結果復活し、メディアにも注目していただき、自分の小さくて大きな成功体験になりました。自分の研究領域と趣味領域と実際にビジネスという領域をつなぎながら、一つの目的を達成していくことがうまくできたので、達成感、充実感が非常に高かったです。そういうことをもっとやっていきたいなとその時思いました。ただ、応援してくれる人や仲間がいたのは大きかったです。是非一緒にやろうという仲間がいなければ一人ではやらなかったでしょうね。

ある時は社長、ある時は団体の代表、ある時は研究者～いろいろな立場を越境する

私は「旭区まちづくりポット」というＮＰＯ団体の代表以外に、まちづくりのプランニングなどを行う「ビッグバン・ヌマ株式会社」の社長として仕事もしています。会社の社長だったり団体の代表だったり大学の研究者であったり、それぞれの肩書きによってそれぞれの場面でコミュニケーションが変わってくるというのは正直あります。いい関係がつくれたり、あまりいい関係にならなかったり、それぞれです。それぞれの場面で一番いい関係になるよう立場を使い分けることもします。

ある種いろいろな立場を行ったり来たりするということがコミュニティデザイナーには必要ではないかと思っています。例えば、防潮堤をつくるにも市民、建設業者、行政と、それぞれの立場があると思いますが、ずっと同じ立場にいるとその立場からしか物事が見渡せなくなります。そうなってしまうとコミュニティデザインはできないと思うので、いろいろな立場を持つことがコミュニティデザイナーとしては重要だと思います。一言でかっこよく言うと、コミュニティデザイナーに必要なのは「越境する力」ですね。いろいろな人がいろいろな立場で仕事や生活をしていることを想像し理解した上で、「じゃあどういうふうにしていったらいいのか」ということを考える場をつくり出す力が必要だと思います。

「ソーシャル・キャピタル」をつくる～活動の方向性を決めた概念

社会の信頼関係、規範、ネットワークの重要性を説明する「ソーシャル・キャピタル」という概念があります。この言葉自体に出会ったのは、２００５年の「愛・地球博」の企画に携わった時です。ある文献を読んでいてこの言葉に出会った時の衝撃が大きかったです。つまり自分がやっていることや考えていることを解説してもらった気がしたのです。この言葉の魅力、概念の魅力というものにすごく惹かれました。それで大学院で研究することにしました。

今の自分の活動、仕事を包括する言葉として非常にしっくりくる言葉です。イベントをしているのではなくてソーシャル・キャピタルをつくっているということの方が、自分の仕事、活動に納得できたのです。ソーシャル・キャピタルという言葉自体には、たくさん論文があります。それを信頼だと言う人もいれば、つながりだと言う人もいるし、いろいろな言い方がある訳ですが、どちらかというとそれをどうつくるのかということが私の興味のあるところなのです。ソーシャル・キャピタルをどうつくるのかということが、私の活動そのものですね。

【インタビューを終えて】

私の経験からすると、都市づくりは、まずインフラの整備からと考えていました。東日本大震災以降、人と人のつながりの大切さが見直されてきたように思います。今回もそのような話が中心になりましたが、行政も、このような視点を取り入れていかなければと改めて思いました。（田中）

つながりは強制的なものではなく「選ぶ」もの、コミュニティデザインにはあらゆる立場の方の考えを理解することが必要との考え方に感銘を受けました。聞き手として未熟でしたが、ひとつひとつの質問に丁寧にお話いただきありがとうございました。（小山）

つながりづくりはまず趣味や興味から始まり、自分自身が楽しめ、継続する。「好き」こそが最大の原動力なのではないでしょうか。（武田）